

有馬頼義



中央公論社

女 波

© 1962

検印廃止

著 者 有馬 頼 義

昭和37年 2 月15日 初版印刷

昭和37年 2 月25日 初版発行

発行者 宮本信太郎

印 刷 三 晃 印 刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋 2 - 1

電話・(561)5921代

振替・東京34

定価 330 円

目次

不在の脅迫者	恋	女の窓	夕立	若い夫婦	夜温む	投影	水	勇士の場合	影富士	雨の出発
--------	---	-----	----	------	-----	----	---	-------	-----	------

130	117	104	93	81	69	56	45	33	21	7
-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	---

霜	殺	風	敵、	桐	写	求	文	夏
の		と	味	一			枝	の
朝	意	雨	方	葉	真	愛	の	終
							冒	り
							険	

装
幀
太
田
政
徳

243	230	217	206	192	180	167	155	142
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

女

波

雨の出發

結婚式の日、雨であつたが、花嫁は、この上なく美しく、よそおわれていた。芝白金の高井倶楽部の緑の芝生に、細い雨は、銀の糸のように、音もなく、降りそそいだ。結婚式の日に雨が降ると、縁起がいい、と昔から言う。果してこの結婚が、昔からの言い伝えのように、二人の未来の幸福を約束したかどうか。

美しい花嫁が、色直しをして披露にのぞんだとき、仲人の新郎新婦の紹介のあとで、新郎戸沢勇士の友人が、まず立った。

「戸沢君は、幸福な男です。私は、彼の、中学時代からの友達でありますから、戸沢君の私生活の隅々まで知っています。戸沢君は、学校の勉強も出来たし、酒も、煙草もやらず、一直線に自分の人生を、よく進した男です。しかし、酒も煙草もやらないといっても、決して世に言う堅物ではありません。立派な顔をしているし、立派な肉体も持っているし、会って話していると、こっちの氣持をよく汲んで

くれて、まことに、つき合ひのいい男でありました。それも、あまり神経質に、ではなく、です。——ええ、ほめてばかりいるようですから、一つだけ心配を言いますが、戸沢君は、どつちかと言うと、相手の氣持を考えすぎる、という欠点が無くありません。これは欠点と言えるかどうか分かりませんが、時に、自分の方から積極的に押し通すことがいいんじゃないかと、思ったことがあります。例えば、四、五人でそば屋へ入ります。そういうとき、戸沢君は、まずみんなの食べたいものを聞いて、注文をします。そして最後に、最も多い注文の品を、自分の分として、追加するのです。みんなが、たぬきを食べる。戸沢君は、自分は、天ぷらうどんを食べたいかも知れないが、自分だけ違った、特に高いものを注文する勇氣に欠けていたように思うのです。しかし、こういう性格は、彼の仕事の上には、決して出ませんでした。それが、彼の成功の原因だろうと思ひます。このたび、高井様子さんとの御縁談がまとなり、お二人で、新生活へはいられるわけですが、様子さんにお願ひしておきたいのは、家庭の中でも、戸沢君の意志を、通してやっていただきたい、と言うことです。それによつて、戸沢君が、更に、人間の幸福に向つて、しっかりと歩いて行けることを、私は、友達として期待するものであります。新婦への注文帳のようになりましたが、戸沢君の、最も親しい友達として、あえてこのことを申し上げ、

およろこびの言葉にかえたいと思います」

拍手が起こり、モーニングを着た、その友達が着席した。すると、今度は、花嫁高井様子の友達が、指名されて、おずおずと立ち上った。

「大丈夫ですか？」と勇士はきいた。
様子は、黙って頷いて見せた。
東京駅で、様子の父の高井時弘が、勇士に近づいた。
「頼むよ」と、低い声で、この財閥の老人は、勇士に言った。

「おめでとうございます」と、女友達は丁寧に頭を下げた。
「今日の御盛儀にわたくしのようなもので、お招き下さ

「はい」
「ふつう、嫁の父が、婿さんに言うのとは、意味が、少し違う。いいね」

って、ほんとに、ありがとうございました。わたくしは、様子さんの学校のお友達でございますが、様子さんの明るい、積極的な御性格には、信頼をかけて居ります。お二人の将来は、素晴らしい御幸福が、予定されることを、信じ

「我儘な子だ。君に苦勞をかけるかも知れない」

ます。今日は、ほんとうに、ありがとうございました。様子さん。おめでとうございます」

「御心配には及びません」と、勇士は、明るく答えた。

別に、とり立てて言うほど変ったスピーチではなかったが、記述しておかなければならない。

戸沢勇士は、大学を出るまで、高井の家に寄食していた。ほかに仲間が二人いたが、勇士は、時弘に一番、可愛がられたようであった。勇士は、大学を出ると、五年間、時弘の秘書をつとめた。書生時代と同じ部屋を、その五年前は、あてがわれていた。五年目、勇士は、時弘の手をはなれて、

高井様子の、それぞれの同僚や縁者の短かい祝いの言葉があったから、二人はようやくたけなわになるうとする披露宴の席を立て、別室へ退いた。もう一度着換えて、集った人達に送られて、東京駅へ向うのが普通であったが、披露宴の方は、戸沢勇士の上役のセレモニーで続行され、二人は、身内の者だけに送られ、三台の車に分乗した。勇士と様子さんの車には、様子の母の真起子と、弟の茂が便乗した。

高井財閥系の今の会社にはいった。そのとき、高井家を離れて、郊外に、小さな家を持った。勿論、時弘のさしがねであった。その状態も、五年続いた。大学を出てから、ちょうど十年目に、この縁談が出た。

勇士にとって、様子は、主筋に当った。友達は、そういう考え方は、アナクロニズムだと言って笑ったが、少女時代からの様子を知っている勇士には、その点で、当分、結

婚には踏みきれなかったのだ。しかし、周囲は、それを良縁とみた。時弘が、勇士を信頼している度合いから見ても、そのことは、客観的には、避けられそうもなかった。勇士は、反問した。

「様子さまは、どうお考えなのでしょう？」

「様子は、反対してはいない。家内は、強く希望している。そして、私も、な」

そのとき、それ以上、聞けなかった。

縁談というものは、ちょうど、冷蔵庫の中で、ゼラチンがかたまるように、ある時期をすぎると、それ自体に加速度がついて、急速に進むかのようであった。そこでは、大體に於て、当事者である勇士と、様子の心理は、無視された。勇士の、というと言いすぎだろうか。二人の周囲が、この縁組が、高井家のためにも、勇士のためにもいい、という風に傾き、結婚の準備は、どんどん進められた。

井の頭線沿線の久我山の、小高い丘に、二人の住む家が建てられたのは、結婚式の二ヵ月程前であった。新しい年になって間もなくだ。一度、勇士は様子と一緒に、そこへ行った。二階へ上ると、西側の部屋の窓から、暮れかかる武蔵野のかなたに、富士山が見えた。それは、かなり強烈に、様子をよろこばせたようであった。

「このお部屋を、あたしが使っても、いいかしら？」と、様子は、女らしい目をして勇士を見た。

「どうぞ。気に入りましたか。しかし、西向きだから、夏は、暑いかも知れませんよ」

「かまわないわ」

「かまわなければ、きめましょう。僕はどうせ朝早く出て、夕方帰るのだから、どの部屋だってかまわない」

こういう話のしかたは、本来おかしいのかも知れない。二階の三部屋は、それぞれ独立した洋間で、扉には、鍵がかかるようになっていた。様子には、二人の部屋、という考え方が、最初からなかったのだろうか。

勇士が知っている限り、様子は、小さいときから、自分の部屋を持っていた。夜、ねるときは、だから、常に孤独であった。その習慣が、ぬけていないのかも知れない。

どういうわけか、東京駅で、時弘から「頼むよ」と言われたとき、勇士は、あの、富士山に見える西側の部屋のことを思い出したのだ。様子が我儘な娘であり、勇士に苦勞をかけるとしても、それは勇士にとって、大したことではない。「ふつう、嫁の父が、お婿さんに言うのとは、意味が少し違う」という言葉は、最初の「頼むよ」につながる言葉に違いないが、新婚旅行に出発するとき、今更、それを時弘が、勇士に言いに来たことに対して、勇士は、少し、こたわった。勇士が、ほかのすべての人との間に持っている関係と、少しばかり異質なものが、時弘と、勇士の間には、あったのかも知れない。

すぐに、発車のベルが、鳴りはじめた。人々は、少しはなれて、手を振る用意をした。身内だけだから、ちょっと、新婚旅行とは見えない、地味な出発になった。花束も、新聞社の写真もない。列車が動き出したとき、様子は、母の真起子を見て居り、勇士は、高井時弘の姿を見ていた。

東京の街は、雨の中にあった。いつも、車が通っている道を、上から見ると、違う場所のように見えた。映画館も、正面からはいるときと、裏側から眺めるのでは、別のものようであった。新橋では、フォームが、ガードの上にある、そこに屋根がないので、人々は、傘をさして、フォームを走った。雨は、高いところから、此処では、音を立てて、降りしきった。

「疲れたでしょう」

新橋を出てから、勇士は、はじめて言った。様子は、雨に煙る窓の外を見ていた。

「大丈夫ですわ」

「向うへ着いたら、ゆっくりしましょう」

「ええ」

「一月に一度位、旅行することに、きめてもいいですよ」

「そうね」

「様子さんは」と、勇士は言った。「僕という男に退屈するかも知れない」

「どうしてですか？」

「遊ぶことを、知らないんです。働くことだけが楽しい。友達の手紙のように、酒も、煙草も……」

「そんなことは、退屈とは、関係がありませんわ」

「そうかな。でも、だから、旅行のことを考えたんです。毎月、旅行をする。何年経ったら、日本中を回れるだろう」

そのとき、様子は、少し笑ったようであった。

「あなたには、旅行にも、征服慾が伴うのね」

「征服慾ですって？」と、勇士はびっくりした。

「日本中を、何年かかかって回ってしまおうというのは、征服慾ではありませんの？」

「なるほどね。旅というものは、元来、そういう目的を持たないのが、旅だとおっしゃる」

「ええ」

「そうかも知れない。しかし、僕は、悪意じゃないんです。気にしないで下さい」

「わかってますわ。あなたも、あたしのことを、あまり気を使って下さらなくていいのよ」

横浜を過ぎてから、雨は、小降りになった。小田原で、

一度、西の方に青空が見えたが、列車が、海のそばの断崖を走る頃に、また、こまかい雨が車窓を叩いた。雨のつぶは、音もなく、窓ガラスをつたい流れた。それは、まるで、涙のようであった。内側からハンカチで拭いても、その涙を、とめることは出来ない。

「一つだけ、お願いが、ありますの」と、漾子は、思いきったように、言い出した。

「何ですか？」

「昔のことを、あまり言っていたきたくないんですの」「わかってますよ。僕だって、時々、学生服を着た自分の、若い頃の写真を見ると、寒気がします。おしやれで、意識過剰で、ポーズをとっている。考えてみると、それが青春というものでしょうがね」

「努力しますわ」

「昔のことを、忘れるためにですか？」

「ええ」

「僕にとって、お河童姿の漾子さんのことは、楽しい思い出だけ……」

「誰でも、自分のことは、いやなんですわ」

「そうかも知れませんか。考えるのを、やめましょう」漾子が、そう言い出したことによって、勇士の心は、ふっと古い記憶に向いた。勇士が大学生の頃、漾子は、小学校の上級生であった。漾子の小学校では、五年から英語があったので、漾子は、しばしば、男くさい書生部屋へやって来て、勇士をつかまえた。漾子は、いい匂いをさせていた。大学生の勇士にとって、漾子の英語なんか、何でもなかった。しかし、そのために、漾子の成績がよくなったかどうか、わからない。

何故、漾子は、その頃のことを、忘れようとしているのか。その理由は、定かではない。少くとも、勇士の側で、楽しい思い出が、漾子の側で、何故、不愉快なのだろうか。漾子は、少しばかり、自分勝手であったが、充分に可愛らしい少女であった。茂とも一緒に、よく勇士の部屋へ遊びに来た。しかし、漾子には、茂は、まだ子供だ、という一種の優越感があり、わざと、茂にわからないように、英語の単語をまぜて、勇士と話をした。毎晩、二人に襲撃されて、勇士は、あぶなく、大学をすべりそうになったことがあった。しかし、今になってみると、それも、楽しい思い出でしかない。口に出さなければいいのだ、と、勇士は思った。女には、男にはわからない心理が、あるようであった。

湯河原の駅には、五時頃に着いた。湯河原の深い谷は、既に山桜が散りかけていた。濡れた道路に、桜の花びらが散り敷き、車はその上を、あえぎのぼった。その古い宿は、奥湯河原でも、一番上にあった。大して大きくはないが、宿全体が、むせるような新緑につつまれていた。

勇士は、会社の会に、その宿を使ったことがあり、それが度重なり、宿のことは、よく知っているつもりであった。第一に、この宿では、宴会がない。広間がなかった。それが、新婚旅行に、そこを選んだ、第一の理由であった。十年程、時勢に遅れた、その宿の古めかしさも、好きであっ

た。客が着いても、着飾った女中達が、そろって玄関へ迎えに出て来るようなこともない。そこでは、理想的な愉しみと、休息が得られる筈であった。

明るい部屋を、と注文していた。しかし、どの部屋も、大して明るくはない。部屋の中まで、青葉が、かげを落し、若葉の匂いを充満させていた。そして、山あいのこととて、間もなく、暮れた。

勇士が、宿へ着いて、不思議に思ったことが一つあった。それは、自分達のほかに、客が、誰もいないように思われたことであつた。季節はずれではない。しかし、廊下を歩いても、帳場へ行っても、客らしい姿を、一つも見なかった。

「馬鹿に、すいているんだね」と、勇士は、給仕に來た女に言った。

「ええ」

「ほかに、お客さんは、いないの？」

「はい。こちらさまでだけです」

「ほう。そういうことがあるのか」

「主人が申して居りましたが、それですから、家中をお使いになりますように」

「家中をね。——しかし、そんなに要りはしない。お風呂は、どこも、がらがら。ピンポン室も、しーんとしている。妙なときに来合わせたものだ」

「そのかわり、サービスは出来ませんけれど……」

「サービスはいいさ。しかし、ほかの宿は、満員なのだろう？」

「はい」

「おかしいね」

女は、それ以上、何も答えなかった。

女が食膳を下げて行くと、勇士は、美しい花嫁を前にして、少しばかり、気が重くなった。

二人きりになると、廂を打つ雨の音が聞えた。

「まだ、やまない」と勇士は呟いた。

「そうね」と漾子は答えた。

しかし、その短かいやりとりは、少くも、二人の間に、ひっそりとわだかまりはじめた何ものかの存在を消すことはなかった。そのかわり、そのとき、勇士の耳は、雨の音の中に、全く別の種類の音をとらえた。正確にいえば、それは、うたうような声であり、腹に響くような、何かの音であつた。

「何か、聞えますか？」

「いいえ、雨の音だけ」

「変だな」と、勇士は立ち上つた。漾子は、その勇士の動作に、びくつとしたようであつた。

「何か、聞えましたの？」と、今度は、漾子がきいた。

それには答えないで、勇士は、次の間へ出た。そこでは、

何の音も聞えはしない。廊下へ出てみると、雨の音が激しくなった。勇士の耳は、さっきとらえた音を、もう一度とらえようとしたが、雨の音以外には、何も聞えないようであつた。

一度部屋の中へ戻ると、様子は、その短かい間に、着換えていた。勿論、宿のどてらを着るような無神経な女ではなかつた。様子は、きちんと坐つて、大きな目で、勇士を見た。

「耳の迷ひだつたようです」

「何が、聞えましたの？」

「それが、何だか、よくわからなかつた。とにかく、雨の音でも、水の音でもないようだった」

「気味の悪いことを」

「すみませんでした」

最初の機会が、そのときに来ていたのだと、ずっと後になつてから、勇士は悔んだ。しかし、やはり二人で向き合つてしまうと、勇士には、テーブルをまわつて行つて、花嫁の肩に手をかけるだけの勇氣がなかつた。

「疲れたでしょう。蒲団を敷いてもらいましょ」と、勇士は、帳場へ電話をかけた。なかなか、誰も出なかつたが、しばらくすると女中の声が聞えたので、頼んだ。勇士は、煙草に火をつけた。長い廊下を、跣音が近づいて来たのは、かなり時間がたつてからであつた。

女中が、蒲団を敷く間に、入浴するようにすすめたが、様子は首を振つた。

「お疲れがぬけますのに」と、女中はいった。

それから、女中の跣音が遠ざかり、また重い夜が来た。

「ほんとうに、お風呂へはいりませんか？」

「ええ」と、様子は、答えた。様子の中に、確かに、何かがあるようであつた。勇士の中にあるものと、同じものの反対側なのだろうか。

「じゃあ、休みましょ」

様子は、そのとき、びつたりとつけて敷かれた蒲団を、僅かに動かしした。蒲団と蒲団の間に、川のような聲が見えた。

新婚旅行に來たのだ、と勇士は、自分に言いきかせた。

たとえ過去がどうあろうと、様子は、自分の妻になつた女であつた。何故、素直に、様子を、妻として扱えないのか。

勇士の煙草が燃えつきないうちに、様子は再び着換えた。東京から持つて來た、新しい浴衣であつた。心の中はとも角、そういう様子には、勇士の妻になつた自分に疑いを抱いてはいない行為を、見せているようであつた。

しかし、勇士が、煙草を、灰皿に押し当てたとき、再び、奇妙な音が、勇士の耳をとらえた。

「また、聞える」と、勇士はつぶやき、浴衣の上に、どてらをひっかけて、立ち上つた。様子は、顎まで掛布団を引

き上げて、勇士を見た。

「何が、聞えますの？」

「わかりません。しかし、気になるから、見て来ます」

様子とはめなかつたし、自分一人が、部屋の中に残されることに、恐怖は、感じていないようであった。勇士は、既に、かなり神経質であった。ほかの宿が満員で、この宿も、いつもはこんでいるのだが、それが、今日に限って、ほかに客がない、というのは可笑しい、と勇士は考えていたようであった。

さっきと同じで、その部屋では、廂を叩く雨の音が聞え、次の間では、何も聞えない。廊下へ出ると、また雨の音が激しくなった。勇士は、素足にスリッパをはいて、長い廊下を歩いていった。人氣は、全くない。どの部屋の前にも、スリッパはなかった。廊下の角をまがって、帳場の見えるところまでくると、さっきの女中が、所在なさそうに、椅子に腰かけていた。女中は、勇士の姿を見ると、あわてて立ち上った。

「何か？」

「別にはしいものはない。しかし、何か、音が聞えるのだ。何の音かわからない。確かめに来たのだ」

女中の顔色が、かわったようであった。

「何かお買物でしたら、お部屋へお届けいたしますわ」

「そういうことではないのだ。くだいようだが、何故、僕

達の他に、客がないのだね？」

勇士がそう言ったとき、突然、近くの部屋から、木魚の音と、読経の音が聞えて来た。勇士は呼吸をのんだ。

「あれは？」

「わかってしまったのなら、隠しません。実は昨夜、主人の母が、亡くなりましたの」

「あの、肥ったおばさんが？」

「はい」

「通夜か？」

「はい」

「何故、我々をことわらなかったのか？」

「予約をいただいてから、急に悪くなったんです。ほかのお客様は、おことわりいたしました。戸沢様では、おことわり出来ません。一番西の部屋で、通夜を営み、一番東の端のお部屋をおとりしたのです。申しわけございません」

「死んだのか」と、勇士はつぶやいた。

「はい」

「長くわずらったのかね？」

「いいえ、突然です。お気を悪くなさるといけないと思って、主人は、隠しておくように申しました」

勇士は、別にかつき屋ではないが、この偶然には、ちょっとびっくりした。馴染みである自分は、本来なら、通夜